

週日の説教

金 大烈 神父 2008年8月29日(金)

《これからの人生に希望をもたなくてはなりません》

洗礼者ヨハネの生涯は聖書を通してよく知っています。簡単に要約して紹介しますと、彼は、キリストの先がけの役目をしました。救い主がこの世に来られるために道を整えました。悔い改めさせて洗礼を授けました。そして、キリストが十字架にかけられることの先がけとしては、ヘロデによって首を切られるという殉教の姿でした。

ヨハネの母はエリザベトです。では、息子ヨハネを見る母親であるエリザベトの心はどのようなものだったでしょうか。子どもを望んでいたのにできなくて諦めてから沢山時間が経ち、子供を望んだことさえ忘れた位の高齢になってから神様のみ旨によって突然、赤ちゃんを授かります。何という幸せなことだったでしょう。その子どもは、親の愛情をたっぷり貰いながら成長したと思います。しかし、青年になったヨハネはある日、荒野に行つてイナゴとミツを飲みながら、叫び声となり、人々を改心させます。その姿を見る母の気持ちはどうでしょうか？そしてある日、叫び声が大きすぎて王に首を刎ねられてしまいます。そんな便りを耳にしたらどんな気持ちになるでしょうか。辛いでしょう。話せないような辛さだったでしょう。

「運命」という言葉がありますが、どういうものか知っていますか。自分が今まで歩んできた人生を振り返ってみてください。それを「運命」だと思っていますか。仕方なく、しなくてはならないことを「運命」といいます。では、いつかイエス様を裏切り、自殺するのは、ユダの生まれたときからの運命だったのでしょうか？運命というものはあるのでしょうか？

「召しだし」という言葉があります。司祭や修道者になることです。「あなたは、神様から呼びかけられているから、最後まで司祭職を果たさなければならない。それはあなたの運命だから。」というのが正しい考えでしょうか。では、イエスさまの御心はどうでしょうか。もし、ある司祭がいれば、呼びかけに応じて司祭職を果たすことを誰よりもイエス様は望んでいらっしゃると思います。しかし、「あなたが一番幸せな道を選んでほしい」というのがイエス様の御心だと思います。たとえば、ユダにはキリストを裏切らない人生もあったかもしれない。自分で、裏切らないように望めば、その道を避けられたのかもしれない。神様は、慈しみ深い方です。'自分の栄光となる救いのために、犠牲を払ってほしい'という厳しい神様ではありません。「運命」という言葉は、閉じている感じがしますが、カトリック信仰の中でいう「運命」は開いているものです。

私が今日、この言葉を通して皆様に言いたいのは、『過去を振り返ってみると、「きつかった、悲しかった、切ない運命だった。」という思い出を持っていて、その気持ちのまま残っている人生を迎える人が多いけれど、「振り返ってみて、あらゆる全てのことが恵みでした」という告白が出来るようになるためには、これからの人生に希望を持たなくてはならない』ということです。今までは、あなたの呼びかけに忠実に従ってついていくのが無理だったかもしれないけれど、これからは頑張つてあなたが望んで整えてくださったその道を歩みます、という希望を持つことが出来れば、私たちの運命はいつも希望的になります。ですから、今を善く生きることが大切です。

母としてのエリザベトの気持ちは辛かったでしょう。しかし、永遠という時間の目で見れば、ヨハネは救い主の為にその道を整える使命を果たした素晴らしい人生を歩んだ方です。一番素晴らしい人生を歩んで、永遠の冠をいただく主人公になったのです。私たちも '手遅れ' という考えは捨てましょう。これからどのように私たちの人生が広がるか分からないのです。その時、「できるだけあなたのみ旨を果たそうと頑張り、ついて行きます。」という心になれば、私たちは幸せになれると思います。それが私たちに任されている運命です。その運命を、イエス様の恵みをいただきながら、出来るだけきれいに美しく格好よく生きるのが私たちの一番大きい召しだしではないでしょうか？

ありがとうございました。